

2026/6/6 シンポジウム「若者のすべて」のゲスト

## 川瀬洋平氏からの手記

6月6日(土)10:00~12:30に龍馬海浜幕張校にて、私の自慢の教え子の原点ともいえる川瀬洋平氏をお招きしてのシンポジウムを開催しました。

海浜幕張校は、全学年総勢16名しかいない小世帯ですが、13名の保護者の方にご参加いただきました。

中学受験塾ですので、中学受験の話を中心に考えていたのですが、氏が産業医であり、「生きづらさ」に向き合う仕事をしているということもあり、次第に「心理学」の見地から「親子の向き合い方」はては「鬱病」についての質問が出るなど、“中学受験塾”とは思えない話にまで発展していきました。

終わってから、ある参加者に忌憚なく感想をお聴きしたら、「もっと川瀬さんの話を聞きたかった。先生(安本)、しゃべり過ぎ!」と言われてしまい、苦笑しました。

ここでも自分の老害ぶりを指摘された訳ですが、自分の役割を見直す良い機会になったと思っています。

ご参加できなかった方にも、ご参加された方にもご報告した方がよいと思い、これをお配りいたします。

安本満

### 次回 7月5日(日) 10:00~12:00 シンポジウム「赤い風船 1999」

今回は3人の教え子に来てもらい、“中学受験からの現在”という視点からのシンポジウムです。是非お誘い合わせの上、ご参加下さい。

お申し込みはお電話・メールにて受け付けております。

## 海浜幕張の午後 —— 恩師に呼ばれて

### 十人ほどの、ささやかな会

その日、私は呼ばれて海浜幕張へ向かった。

龍馬進学研究会。中学受験の塾だ。そこを起こした安本満先生は、私にとって特別な人である。三十数年前、まだ日能研が四ツ谷大塚に次ぐ規模だった頃、津田沼校で一番上のクラスを受け持っていた三十一歳の若い講師。それが安本先生だった。私はそのクラスの生徒のひとりだった。

その安本先生が、新しく開いた海浜幕張校に私を呼んでくれた。約二時間半のセッション。十人ほどの保護者が集まる、ささやかな会だった。十七年前、龍馬進学研究会創立十周年の会に親子で呼ばれたときは百二十人を超えていたという。けれど先生は言った。これは逆に記録だと。双方向で話せるこの距離感のほうが、むしろいいのかもしれないと。

その言葉に、先生の今が滲んでいた。六十九歳。「老害になってしまった」と笑いながら、四十数年この仕事を続けてきて辿り着いた一点を、この日語ろうとしていた。

### 前振りという名の、長い物語

先生は私を紹介する前に、ひとつの物語を語り始めた。

「ちょっと話が長いです」と前置きしながら、それでも「このストーリーを紹介しないと話にならない」と言って、譲らなかった。

三年生で受けた公開模試の偏差値が 37 だった少年がいた。最下層に近い成績。それでも体験授業を受けて「行きたい」と粘って日能研津田沼校に入ってきた。努力するタイプだった。目の前の一歩をきちんと積む。先生はその少年を「イチローみたいなタイプ」と呼んだ。

その少年には親友がいた。江連という名の、長嶋茂雄のような天才肌。二人はライバルで、親友で、いつも一緒だった。冬期講習の休憩十分のあいだに、受付の前をほふく前進ですり抜け、イトヨーカドーの外階段を七階まで駆け上がってタッチして、汗だくで戻ってくる。意味などない。ただ抜け出していたいだけ。津田沼校にいた別の先生が懲らしめようとして拳を振りかざすと、二人はスウェーバックで見事にかわして、ブーンと飛行機の真似をして教室へ戻っていく。そういう悪ガキたちだった。

その二人がよく勉強した。卒業する頃、最終偏差値は 68.8 と 68.9。最初は 37 だった少年が、

灘・開成と同列に語られた当時の難関校の合格ラインを超えていた。

開成入試の日。慎重になりすぎたのか、得意なはずの社会で資料を読み込むうちに時間切れになり、半分しか解けなかった。大ショック。家に帰ってやり直したら、半分の時間でほぼ満点だったという。

合格発表の日、先生は掲示板を見に行った。当時はネット発表などない。胴上げ、歓声、そして落ちた者の沈黙。その人混みの中で、先生は、江連が怒ったような顔で母親を急かして去っていくのを見た。連番だった二人の受験番号。片方の番号はあって、片方はない。江連は、親友に会いたくなかったのだ。落ちたのは、少年のほうだった。

開成発表の日、二人は巣鴨中を受けていた。巣鴨は当日発表。当時の偏差値は今よりかなり高い。夕方、少年は開成に届かなかったショックを引きずりながら、巣鴨の発表を見に行った。その道中の張りつめた心情を、後に少年の母が「蛇の生殺し」という一篇の名文の中で綴っている。巣鴨に向かう道中、開成に受かったほうの江連とすれ違う。江連は自分が巣鴨に受かったとは言わない。2月。あたりはもう暗くなっている。「川瀬！ラ・サール、頑張れよ！！！」——江連は、遠くからそれだけ叫んで別れたという。そして巣鴨の掲示板に、少年は自分の番号を見つけた。そこで、堪えていたものが一気に溢れた。どっと涙がこぼれたと、母の手記にはある。

その夜、先生のもとに電話がかかってきた。江連だった。合格の知らせかと思えば、江連はこう言った。「先生、僕、ラ・サール受けるのやめようと思っているんです」と。理由を聞くと——「いや、川瀬の本命はラ・サールなのに、俺と一緒に遊んでしまう。あいつの邪魔になりたくないから、もう会わない」と。小学六年生が、そう言ったのだ。

ラ・サールの入試は二月下旬。関東の子の受験はとうに終わっている。授業もないのに、その少年だけが、たった一人で塾に通ってきた。バレンタインに事務員からチョコをもらって「得したな」と笑い合った。

ラ・サール合格。鹿児島から戻り、英語コースに遅れて顔を出したその日。休憩時間、教室のドアがバーンと開いて、真っ先に飛び出してきたのが江連だった。巣鴨発表の日以来、初めて二人が出くわした瞬間。先生の目にはスローモーションに映ったという。

パッと見合った二人は——なぜか、恥ずかしそうに下を向いた。「久しぶり」「おう」。それだけ。先生は後ろでそれを見ていた。「かっこいい」と思った。小学六年生の青春だった。

何年も経って、三十代になった二人と酒を飲んだとき、先生は聞いた。「お前たちにとって中学受験ってどんなものだった?」と。二人は「青春です」と答えた。即答だった。それが、たまらなく嬉しかったと先生は言う。

その少年が、私だった。

## 先生が辿り着いた一点

長い前振りを語り終えて、先生は核心を口にした。

塾の講師は、勉強を教えるのが仕事だと思い込みがちだ。けれど四十数年やってきて分かったのは、そうではないということ。一人ひとりの子に、自分なりの受験生活という「ドラマ」を持たせてやること。合格も不合格も、すべてをひっくるめて、自分の人生のかけがえのない1ページだったと思わせてやること。それが一番大切な仕事ではないか、と。

「うちに来れば合格できます、なんて口が裂けても言えません。そんな魔法は持っていない」。やるのはあくまで本人。私たちにできるのは、頑張っていることの尊さを植え付けてやることだけ。辛いことを乗り越えてこそ幸せがやってくる——それを味わわせてやりたいのだと。

結果で子どもの価値を測らない。その価値観を大人が持っていないと、子どものトラウマはそこから生まれる。過程を評価する。過程を頑張るチャンスを与える。それが親の、そして大人の役目ではないか。

その根っこには、私の母の言葉があった。安本先生が今も大切にしている一節。「親が自分の勝手に産んだ以上、この子が生まれてきてよかったと思える人生を歩ませるのが、親の責任だ」。これが、独立後の龍馬の根底にある思想なのだと先生は語った。

## 私が座って

紹介を受けて、私が前に座った。

七十歳になる先生が「じゃあ僕も座らせてもらいます」と隣に腰を下ろす。最初の質問が「で、どうなの五十歳。生きてて良かったと思ってる?」だった。雑すぎる、と返ししながら、私は答えた。「生きてて良かったと思ってる。それはもう毎日。今が一番楽しい」と。

これは、ただの社交辞令ではなかった。先生はそれを知っている。私が産業医として、組織や人の「生きづらさ」に向き合う仕事をしていること。先生自身も、去年、もう持たないと言われた時期もあったこと。六十八歳で終わると思っていたものが残ったから、どうせなら、と思って今ここにいること。だからこそ「今が一番楽しい」という言葉に、先生は「親の役目として大成功だ」と目を細めた。

セッションは、そこから親子の話へと深く分け入っていった。

私は今も月に一度、和菓子教室を営む母のもとへ弟子入りに通っていることを話した。たまに会うと喧嘩になる。だから「一緒に何かする」というプロセスを通じて、この六年ほどかけて関係性を作り直してきたのだと。父とは株の話を。共通の話題、共通の営み。それが、噛み合わない親子をつなぐ細い糸になっていた。

私は正直に言った。私の家は、決して「気を抜ける場所」ではなかった、と。三人とも理屈っぽくて、常に意味のある会話ばかりで、くだらない雑談がない。哲学者一家のような家だと。だから親へのLINEは今も敬語になる。けれど、それでいい。親の価値観と子の価値観は違う。その違いを味わい、楽しむ——それを親も感じてくれさえすれば、と。

「生まれてきてよかったと思ってほしい」というのは、突き詰めれば親のわがままでもある、と私は言った。その願いが強すぎると、子は「叶えなきゃ」と苦しくなる。先生はそれを「わがままだ、それは希望だ、親の責任だ」と受けた。エゴと愛は、言葉ひとつで姿を変える。けれどエゴと切り捨てるわけにもいかない。なぜなら、親だから。お互いが愛しすぎているからこそ、お互いの気持ちが分からなくなる——先生はそう言った。

## 子どもが嘘をついたら

途中、一人の母親が、絞り出すように打ち明けた。小学五年の息子が、龍馬に通いたいと自分から言ったのに、宿題を二週間もやらず、嘘をつき、三日連続でぶつかり合った、と。教材を部屋から出してしまった、これでいいのか分からない、と。

私は思わず言った。「めちゃくちゃいい経験ですよ！」と。順調な子の親は振り返らない。振り返りたくなる経験がない。バトルが起きるのは、自らの経験に向き合っている証拠なのだ。

先生は「子どもは愛してもいいが、信じてはいけない」と自著に書いたと笑った。嘘をつくのは当たり前。嘘をつかないと生きていけない瞬間が、子どもにはある。だから嘘そのものに怒ってしまうと、大人も同じ次元に降りてしまう。嘘と分かったまま「お前のことを信じる」と子供に告げると、一週間後に本人が「嘘でした。ごめんなさい」と自白する——そんな現象を、先生は何度も見てきた。

私が付け加えたのは、龍馬が他の塾と違う一点だ。効率よく合理的に「こうすれば結果が出ます」とは決して言わない。結果ではなく過程そのものに価値があると言い続ける。龍馬に行きたいのも本当、勉強したくないのも本当、時間がないのも本当、楽しくやりたいのも本当。全部が一人の子

供の心の中にある。嘘をついた瞬間こそ、その奥にある本当の想いを一緒に探しに行くチャンスだ。その過程は、生きることの喜びそのものではないか、と。

私自身、初めて受けた国語の授業で「国語ってこんなに面白いのか」と感じた。あの感覚があったから、その後の苦しいプロセスも面白くできた。過程に価値を見出すこと——先生がずっと生み出してきたのは、それだったのだと、私は改めて思った。

## 産業医として、最後に

会の終盤、参加者から問われた。会社で鬱になる人とならない人、復帰できる人とできない人は、何が違うのかと。

私は答えた。うつのは気分が落ち込むことよりも、動けなくなること。脳が処理しきれなくなる。それは実はチャンスなのに、「乗り越えなきゃダメだ」「完璧にやらなきゃ」という価値観でいると、自分を責め続けてしまう。「～すべき」という言葉を多用する人ほど苦しい。今までやってきたことを「よくなる」と認め、全部やろうとせず、自分にとって最も大事なことを選び、それ以外はやらないと選択できたとき、人は楽になると同時にもっとも力を発揮する。

そしてホワイトボードに、コンフォートゾーンとストレッチゾーンとパニックゾーンを描いた。安心安全な世界にいと、人の能力はむしろ墮落していく。使わない臓器が退化するように。少しだけ背伸びするストレッチゾーンを行ったり来たりして、キャパシティはじわじわ広がっていく。

中学受験がうまくいかないのも、これと同じ。親が子のコンフォートゾーンを見誤り、「これくらいできるだろう」と自分視点でパニックゾーンに放り込んでしまうと、子は潰れる。マネージャーが部下を潰すパターンとまったく同じだ。そのストレッチゾーンはとても狭く、人によって違う。それをどれだけ見極められるか——。

苦しみを避けてばかりいと、コンフォートゾーンは縮まっていく。けれど、そこにしか成長はない。その過程は楽しいことばかりではない。むしろ辛いことの方が多い。けれど、その過程こそ、生きる喜びに溢れているのだ。

時計の針が十時半を回り、予定の時間を過ぎていた。「川瀬先生の楽しい講義、終わらせていただきます」と先生が締めくくった。どうもありがとうございました、と。

## 帰り道に

ホワイトボードに描いた図と、先生が語った開成発表の掲示板と、二月にたった一人で通った塾と、恥ずかしそうに下を向いた六年生の二人と——それらが一本の線につながっていることに、帰り道で気づいた。

過程にこそ価値がある。結果で人の価値は測らない。生まれてきてよかったと思える人生を。

三十数年前、偏差値 37 だった少年に安本先生が手渡そうとしていたものを、私は今、産業医として、別の言葉で誰かに手渡そうとしている。コンフォートゾーンの図を描きながら、私は気づいていた。これは、あの津田沼の教室から、ずっと続いている一つの物語なのだ。

恩師に呼ばれて行った海浜幕張の午後は、過去と現在が静かに交錯した瞬間だった。